

第3回福井県高等学校教育問題協議会 議事録

□日時 平成20年 2月22日(金) 14:00~16:30
 □会場 県庁 地下1階 正庁
 □出席者 委 員：金井委員、四戸委員、杉田委員、瀬尾委員、津田委員、橋詰委員、馬場委員、福田委員、藤井委員、藤田委員、三上委員、山崎委員、吉岡委員、吉川委員、吉田委員(15名、五十音順)
 オブザーバー：県高等学校教職員組合 鈴木執行委員長、県教職員組合 余座書記次長、県中学校長会 堀田会長、県高等学校長協会定時制・通信部 制部 矢崎部会長、県高等学校長会 吉田会長(5名、五十音順)
 □事務局 広部教育長、伊藤教育庁企画幹、加藤教育庁企画幹(学校教育)、山内教育政策課長、中島高校教育課長

○開 会

教育政策課長 定刻となりましたので、ただいまから第3回目の福井県高等学校教育問題協議会を開催いたします。皆様方には、お忙しい中、御出席いただき誠にありがとうございます。本日委員の御出席でございますが、現在13名、あとお二人来る予定をされております。過半数に達していますことを御報告申し上げます。それでは開会に当たりまして広部教育長から一言ごあいさつ申し上げます。

○あいさつ

広部教育長 一気に春めいた陽気になってまいりましたが、本日は、大変御多用のところ、第3回目の福井県高等学校教育問題協議会に御出席賜りまして、誠にありがとうございます。お礼を申し上げます。

去る1月23日に第2回目の会議を開催いたしまして、社会のニーズに対応した職業系学科の在り方について御議論をいただきました。前回は、私どもの方から、本県の産業の構造と県立高等学校の職業系学科の現状を御説明申し上げた後、職業系学科の望ましい在り方について、委員の皆様方に熱心に御議論をいただきました。委員の皆様からは、中学の時点における進路選択の困難さ、さらに、生徒や社会のニーズの多様化と高校の学習内容の間のギャップの存在、あるいは、教育効果を高めるには一定の学校規模が必要、等の課題の御指摘がございまして、それらの課題への対応として、それぞれの職業に関心を深めることのできる感動を与える教育の必要性、さらに、1年目には職業観の育成・基礎学力の向上を行い2年目から専門的な学習を行うような教育体制の導入、あるいは技術なり産業なりの目的が明確化した総合技術高等学校の導入、あるいは大学も併せた7年間での職業教育の必要性、等の御意見をいただいたところでございます。

今回も、前回に引き続きまして、職業系学科の在り方について議論を深めていただきたいと考えておりまして、委員の皆様方それぞれのお立場から幅広いご意見をお願いしたいと考えております。皆様方におかれましては、生徒たちにとって最良の教育環境を整備するという視点から、職業系学科の望ましい在り方につきまして、十分な検討をお願い申し上げたいと思います。よろしく願いいたします。

○議 事

教育政策課長 それでは議事に移らせていただきますが、まずお手元の資料の御確認をお願いしたいと思います。本日の会議次第に始まりまして、委員の名簿、配席図、12

月にお願ひしました諮問文をつけてございます。

その次に資料1としまして、今回の協議会の協議資料がございませう。事前にお配りいたしました資料に追加のページがございませうので、御注意の程、お願ひいたします。

それから、参考資料1ということで、これは前回に提出させていただきました資料でございませうが、前回御意見がありましたように、卒業者の就職先の業種を少し細分化させていただきました。

それから、参考資料の2、これも前回提出した資料でございませうが、前回に加えまして、20年度入試の志望の状況も参考にお付けさせていただきます。それから、卒業者の就職先の5年間の推移について、16ページ以降、追加をさせていただきます。

参考資料3につきましては、前回の資料と同じ、参考のためのデータ、事例集でございませう。また、最後、参考資料4といたしまして、前回の高問協における議事録をお付けしております。以上でございませう。

それでは、以降の議事進行は、福田会長にお願ひしたいと思ひます。福田会長よろしくお願ひいたします。

福田会長

皆様こんにちは。よくいらっしやいました。早速、議事に入りたいと思ひますが、前は非常に熱心な議論をいただきまして、本当に感謝いたしております。今回も前に引き続いて、「社会のニーズに対応した職業系学科の在り方」について、御議論を賜りたいと思ひますが、まず、事務局の方から前の会議における意見、提案等の要点について説明していただきまして議論に入りたいと思ひます。もう一回、今までの議論を再確認する意味で、御説明願ひたいと思ひます。では、事務局、よろしくお願ひいたします。

高校教育課長

よろしくお願ひいたします。まず資料1「第3回福井県高等学校教育問題協議会 協議資料」を御覧ください。前回の意見および提案要旨について説明をさせていただきます。

まず1ページを御覧ください。論点1から論点4の観点から議論をしていただきました。

その中で委員の皆様方からの意見・提案として、まず、「1. 職業系学科の現状と課題」というところで活発なご意見を賜りました。その要旨をごく簡単に述べさせていただきますと、中学校3年の時点において、生徒自身が農業とか工業の電気とか、将来設計を踏まえた進路の選択をすることはなかなか難しい。現実には、自分の成績や周囲の状況で決めているのが現状である。そういう中では、高校に入ってすぐ進路を決めるということではなく、1年くらいは猶予があつてはいいのではないかという議論があります。もう一点は、生徒によっては、中学校のレベルの学力が身に付いていない場合があるということでございませう。そのため、高校において補習をする必要があるというのが課題として指摘されました。また、社会のニーズと高校の学習との間、また中学校と高校の間などに様々なギャップが存在しており、また一方では、進学率が上昇する中で高卒の就職先が狭まってきているという状況もあります。さらに、生徒数が減少していく中、学校規模の小規模化が進めば、学科自体の運営が成り立たなくなる恐れがある。また、学校教育の原点は集団の力によっているというところがあります。生徒数の減少が進む中で、子どもたちの志望をどう実現するかが課題であるという御意見を賜りました。

2つ目に職業系学科の方向性というところで、資料の3ページから5ページにあります御意見を賜りました。まとめますと、まず、先ほどもありましたが、

中学校の段階で進路を決めるのが難しいので、1年目は高校で基礎学力の向上と職業観の育成を行い、2年目から専門的な学習や進学に向けての体制をとった方がよいのではないかと。総合学科を検討する場合、特にモラトリアムの先延ばしにはならないような配慮が必要。また、各々の仕事に誇りが持てるように、また惚れることができるように、感動のある教育が大切。生徒が、より具体的な選択ができるようなカリキュラムの見直しが必要。どういう能力をつけて、どういう方向へ就職するかが明確になる学校である必要がある。このような意見を賜りました。

3番目に、具体的な方策として、いくつかの議論をいただきました。それが5ページから6ページにかけて記載してあります。簡単に申し上げますと、総合技術高校、総合産業高校の導入を検討したらどうか。総合技術高校等の検討に当たっては、地域や生徒のニーズに配慮するとともに、目的の明確化、関連業界との連携等を図る必要がある。大学のように1年次は職業観の育成や基礎学力の定着を行い、2年次から専門的な学習を行うようなスタイルはどうか。他の高校・学科への転校・編入等、高校連携を進めてはどうか。また、大学も合わせた7年間での専門教育を考える必要がある、というご意見を賜りました。

10ページを御覧ください。過去の高問協におきまして、「21世紀を展望した本県の望ましい高等学校の教育の在り方」について諮問し、平成10年の3月に答申をいただいております。基本的な方向性、学科の設置の在り方、教育の内容等について、基本的な考え方の答申をいただいております。その中で、農業科、工業、商業、水産科、家庭科、衛生看護科、福祉科という形での、各学科の配置等についての答申をいただいております。農業をみますと、本県の新しい農業の発展・振興を目指して、農業の専門高校を県下に1校は必要という形でいただいております。

11ページ、12ページを御覧ください。石川県が昨年10月、富山県が12月に県立学校振興計画等を出しておりますので、議論の中で御参考にしていただければと思います。以上です。

福田会長

どうもありがとうございました。今回は、前回に引き続いて、社会のニーズに対応した職業系学科の在り方について御議論いただくわけですが、今回はもう少し突っ込んで、農業系、工業系など、各々の職業系学科の望ましい在り方ということで議論を行いたいと思うところがございます。まず、商業系学科から始めたいと思いますが、現状と課題および論点につきまして、これも事務局から簡単に説明願えますでしょうか。

高校教育課長

それでは、資料1の7ページを御覧ください。まず商業学科についてお願いいたします。この前も申しましたが、福井県の商業学科は、そこに記載しましたように、石川県、富山県と比べますと、高校の生徒数に占める割合が高くなっております。その中で、いわゆる経理・営業というような、商業学科を卒業した生徒の仕事というのが大幅に変わりました。その中で、今、マネジメントといわれるような幅広い能力とか、ある意味で起業家精神というようなものが求められております。その中で、前回も指摘がありましたが、いわゆる経理の事務職・営業職などの就職先が狭まる中で、進学希望が非常に大きくなって、65%という数字になっております。そこで、商業学科の教育がどうあるべきか、また、このように進学が非常に増えている中で、どういう方向性があるべきかというような御議論を賜ればと思います。以上です。

福田会長

どうもありがとうございました。専修学校なども含めての数字であります、

進学率が平均すると65%と非常に高い。進学率が高いということが、商業系学科のひとつの特徴であるということです。前回までの議論でも、商業を出ても、受け入れ先、例えば銀行の例を挙げられましたけれども、就職しようと思ってもなかなかそういうものがないというようなこと。まあ企業側との問題。そういうことがございますから、いわゆるインターンシップとの関係等も議論されたかと思えます。当然これからは、地域のいろんな発展に呼応しまして、新しい産業ないしは企業を起こしていくと。要するに起業するということも、これからはどんどん必要になってくよいかと思えますが、こういうようなマインド、起業マインドの養成はどうするのかという問題。それから、繰り返し議論されたのは、進学希望者に対して、どのようなカリキュラム設定をやっていたらいいのか、あるいは学校の配置、科目の選択等も含めまして、どのように対応していったらよいかということが、今後の問題としてあろうかと思えます。この辺に焦点をぼりながら御意見を賜りたいと思えますが、いかがでしょうか。商業科は、県内の北の方から南の方まで広く分布していると思えますが、どうでしょうか。活発に御意見をお出しただけならと思えます。論点についていかがでしょうか。

杉田委員

大学等への進学が65%とすると、残り35%の方が主に県内企業などへ就職されているということかと思うんですが、これだけの数字の生徒たちが進学となると、普通科から大学へ行く場合と、商業の勉強をして大学へ行く場合との違い、またそれによるメリットがあるのかないのか、また、商業を勉強して大学へ行って、商学なり経済なりの勉強をするのであれば、それを踏まえた上での商業の授業の仕方というのも考えられるのではないかと。おそらく今の高等学校の商業の勉強においては、その辺までの突っ込みはしていないと思うんですが、今後、生徒たちの進路とか、大学へ行って社会へ出てからの活動状況などがもう少し分かれば、カリキュラム内容なんかで工夫できるのではないかという気はします。

福田会長

非常に貴重な御意見をありがとうございます。現状の分析がもう少し必要ではないかと。進学というひとつの括りにしておりますが、その中でどういう部類の進学をしているのか、商業とどういう関係の進学があるのか、この点については、事務局でデータをお持ちでしょうか。

高校教育課長

参考資料2の15ページをお開きください。さきほどはアバウトでお話ししましたが、商業系の進学は19年で61.5%ですが、4年制の大学に23.6%の卒業生が行っております。基本的には商業・経済・経営系などが7・8割を占めております。これは国公立ですと、推薦で行く生徒が多いです。一方、短大・専修学校になりますと、商業科との関連はかなり薄くなっております。

福田会長

4年制大学の場合は、やはり商業に関連したところに進学する生徒が多いということですね。そのような場合、商業という特性を活かしながらの進学という風に言えるかなと思うんですが、杉田委員どうでしょうか。

杉田委員

生徒たちが、実際やむを得ず行っているのか、高校と大学の勉強が一貫しているのか、その辺がもう少し分かりませんが、数字でそういうものが出ているということは、一応、商業系の高校から大学の経済・商業系への進学につながっているという気はします。

福田会長

短大・専修は、少しニュアンスが違っているという感じでしたが。その他にありますでしょうか。

- 橋詰委員 現状ですけれども、福井県の商業系の生徒数の割合が12.3%で全国平均を相当上回っていると。これはなぜかということ进行分析しなきゃいけないと思うんですね。おそらく何かの理由があるのではないかと思います。その結果、ミスマッチがあるのか分かりませんが、結果的に大学に進学するということが起きているのではないかと推定されますが、もう少し現状について説明いただけないでしょうか。
- 福田会長 いかがでしょうか。生徒の割合が12.3%と、石川県の倍近くある、富山県よりも多いと。これは一体どういう理由によるのかということなんです。
- 高校教育課長 なかなか難しいのですが、福井県の場合には、高校の定員を決めるに当たり、中学校3年生の9月の段階での志望状況がかなり大きな要素を占めております。何々学科、そこに何人の生徒が志望しているかということがかなり大きな要素を占めておりますので、その時点で商業は人気があり、割合が高いということ。もう一点は、商業の場合にはミスマッチではなくて、進学も就職もどちらも、フレキシブルといいますか融通がきくと。こういう点に人気があるというように認識しております。
- 福田会長 むしろこの場合は、ファジーなところで人気があるという御説明かと思いますが、ある意味では、選択肢・自由度があるというように言えるかもしれませんが、専門科が完全に分化しきっていない、要するに専門性が乏しいと言い換えることができるかとも思います。これは、どちらが良いか悪いかという問題ではなく、商業科にはそういう特徴があるということですが、いかがでしょうか。
- 橋詰委員 ファジーなところがあるということ、選択肢があるという魅力があるのかもしれませんが、もうひとつは、商業高校でスポーツをやりたいとか、学校そのものに惹かれるというところがあるのかと思うんです。そのあたりを見ていかないと。本当に問題があるのならば、カリキュラムとか学校の再編とかを考えなきゃいけないけれども、生徒にとっては、自分の高校生活をサークル活動や部活動を含めてエンジョイしたいと、そういうものがひとつの持ち味になっているのならば、ある意味でそれもいいかなという感じはします。将来、就職するか進学するかよく分からないし、例えば、子どもの中には、バレーボールとか野球がやりたいというようなことも中にはあるでしょう。そういういろんな選択肢を幅広く取り入れるということであれば、それはひとつの持ち味かもしれませんね。私が心配していたのは、商業とかの魅力に惹かれて入ってはみたものの、ちょっと違くと。やはり進学すべきだと急遽方向転換して、ミスマッチというものが商業高校では起きているのではないかと心配したんですけれども、起きていないとすれば、それはきちっと捉えてほしいなと思いました。
- 福田会長 課長の言葉ではむしろ、ゆとりがあって、モラトリアムが長く保てると。いい面じゃないかとのニュアンスが伝わってくるんですが、いかがでしょうか。
- 高校教育課長 そこまでは思っておりません。基本的に、スポーツとか、普通科に付属している商業科が多いということもあります。モラトリアムという言い方は少し言いすぎかなという感じがします。
- 福田会長 分かりました。いずれにしても、ゆるやかなフレキシビリティがあると。そういうような部分が商業にはひとつの特徴としてあるということですね。ただこれ

は、進学組と就職組とが共存できてうまくできているということでしょうか。また、高校にはある一定のサイズが必要なわけです。サイズがないと、恐らく先生の数なども支障が生じますし、かなり難しいことが生じるとは思います。今、商業科がかなりうまく行っている、ある程度選択が自由に伸ばせるというのは、学校のサイズとはある程度関係はしているのでしょうか。

高校教育課長 もう一点は、これは全国的にもそうなんです、女子生徒が大体6割強といった点が商業科の大きな特徴であるということが言えると思います。そこに、今言われたことも関係してくるのではないかと考えております。

福田会長 他にいかがでしょうか。

吉川委員 今回の自由度とか融通性に関してですが、職業系学科は、専門科目を25単位以上履修すると決まっているんですが、商業学科は、英語で以前は10単位くらいだったんですが、相当英語で代替できるんですね。そういう面で、学科も進学向けの学科あるいはコースができるというような面もあります。

福田会長 それは商業に限ったことでしょうか。

吉川委員 特に多いです。特に英語で代替できるというのが大きいです。

高校教育課長 今言っていたことは、商業に関しては、5単位だけは商業英語として読みかえられるということになっております。

福田会長 20単位は専門のものが必要ということですね。5単位だけ商業英語ということで英語でリプレースすることができる。他に何かありますでしょうか。

山崎委員 商業コースの特色や中学生が商業科を希望する際のメリットということについてですが、2点あると思います。ひとつは、進学が他のコースよりも可能であるということ。これは受け入れる方の大学としましても、大学には当然多くは普通科から進学してくるんですが、その中に何割かの商業科の生徒が含まれることによって、かなり学生が多様化して学習が活性化するという面があります。私は、教育学部で今まで商業科卒業の学生を何人か持ちましたけれども、高校時代に表計算とか分析ソフトの使い方などを学んでおりますので、大学の情報の基礎リテラシーがすでに高校時代に身に付いていると。あとマーケティング、商業関係のものが見方ができるということで非常に他の学生の刺激になっているというメリットがございます。

もうひとつですけれども、マネジメント能力の育成を図ると。これは参考資料2の10ページを見ても、商業科の学科名や教育内容が記載されていますが、文字通りで見ますと、起業家精神やマネジメント能力の育成という点については若干、ものたりないというか、そういうところも表現上は見受けられます。例えば、情報ビジネス科というものがございしますが、これは、ビジネスというよりもむしろ実務ですね、もう少し起業家精神なりマネジメントに力点を置いた教育内容という表現をして、中学生の進学希望に応えるという手はあるのではないかと思います。またこうした起業家精神となりますと、体験するとか、実際に何か企画してやるとかというのが不可欠ですので、販売活動なり文化祭でそういった企画活動をするとか、地域連携ですとか、そうしたことがいろいろこれから可能ではないかと思います。

福田会長 地域連携などは、まさにインターンシップなどがそれに当てはまりますね。長期インターンシップで企業との間の連携をしっかりとっていくというようなことが、前にもちょっと申し上げましたが、企業の側にとっても人材を確保する上で重要ですし、生徒さんの方にとっても企業を知って、それぞれが福井県に残って一生懸命やろうかという動機付けにもなりますし、そういう意味でのインターンシップというのは効果があるかと思います。

四戸委員 今言われたように、パソコンなどを使っての表計算とかですね、そういった専門というか、それから英語についても、会話力とか即戦力になるような教育をもっと徹底して、いわゆる商業科の魅力といいますか、そういうものをつけることによって商業科のレベルアップを図ったらどうかと思います。もちろん、進学したいという方については、そこから十分、同じ系統の商業・経済の分野とかにも道が開けるような教え方をすることによって、ある意味では普通科以上に間に合う学校になり得るのではないかと思います。特に経理事務とかですね、高卒の方とか、特に女子生徒も多いので、地元に残られる方が多いと思いますので、是非、そういうものを強化して商業科の活性を図っていただきたいと思います。

福田会長 非常に積極的な御意見でしたが、要するに、カリキュラムを工夫することによって、もっとマッチングした、企業の方から見ても受け入れやすい有能な人材を育成することができるのではないかというような御指摘、それから進学の方に対しても、商業の特性を活かした進学コースというものを工夫することができるのではないかという御指摘だったかと思います。これは、今ある既存の状況をそのままもっと活性化して対応していこうという考え方ですけども、一番最初の論点にありました非常に小さくなった学校では、なかなかそれができにくいという点がございまして、その場合はどうするかという問題も含めてお考えいただきたいと思います。その点いかがでしょうか。

藤井委員 ちょっと今のお尋ねの件とは違うのですが、先ほど商業科で進学する生徒が出た場合には、一部英語で替えることができるというお話がございましたけれども、例えば具体的方策として挙げられている総合技術高校とか総合産業高校の場合には、もっと柔軟になるのかどうか、現在の商業科で変更しうるものと新しい形の中で対応しうるものと、その違いみたいなものを教えていただけたらと思うんですが。

高校教育課長 総合技術高校とか総合産業高校などは、これは仮の名前でありまして、あくまでもそこに工業と商業が入ってやるという形ですので、そういう条件は基本的には同じになっております。

吉川委員 どの時点で申し上げればよいのか分からないのですが、結局、商業は商業独自で活性化があつてよしいかと思うんですが、例えば、他の学科に商業を併せて学科として持つか、あるいはいわゆる総合学科とするかというようなこと、あるいは、例えば他の学科と商業を2.5単位ずつとるとですね、基礎の必修科目が今3.1単位で、それに2つの学科の分をを足しても8.1なんですね。そうすると実際には、必修科目も少しは足しますから、そういうことはありえないかもしれませんが、ある学科をA学科としますと、A学科でありながら商業も2.5単位とれるというようなところまでいけるんですね。総合学科、今の総合技術高校が羅列するような感じですね。総合学科風までいく、あるいは学科を持ちながらほとんど総合学科に近いようなことをやるという考えがあると思うんですね。といいま

すのは、総合学科高校にすると、いろんな施設・設備がなかなかとりにくいんですね。専門学科にしておくとりやすい面があるんです。だから、ある学科にしておいて、他のものも結構とれるような配置にすると。そういうことも総合技術高校という中で考えていく必要があるんじゃないかと思います。これは、商業科に限ったことではないので、いつの時点で申し上げたらよいかと書いていたんですが。

福田会長

どうもありがとうございました。今の御意見は、要するに、単に複数のものが集まっただけの総合学科では意味がなくて、相互に連携をして、それぞれのいいところをちゃんと選べるというような、機能的に融合した総合学科が必要ではないかということではないかと思います。他に御意見ございますか。

もう一回繰り返しますが、現在少子化が進んでおります。現在のところ何とかなっているようですが、5年後10年後になりますと、一番最初に事務局から説明があったように、少子化が進むにつれて、商業でも非常に小さな高校が出来ます。その場合に、果たして、同じように英語でも数学でも、進学に対応することが可能かどうかという議論についてはいかがでしょう。山崎先生、いかがですか。

山崎委員

規模の問題というのは、教育環境の問題につながります。当然、これは誰が考えても、あまり小規模ですと、充実した教育ができません。そもそも教員の数が少ないわけですから多様な充実した教育というのがなかなか難しくなります。やはり、ある程度の規模は確保して、特色ある学科、コースを作っていくということが重要だと思います。

福田会長

そういたしますと、いろんな可能性が出てくると思うんですけども、ひとつは、例えばこの間ちょっと申し上げました高校連携みたいな形で、自分の進学に必要な授業だけ別の高校で受けるとか、それから場合によっては、人と人との交流も、先生同士の交流をやっていくとか、いろんな方法があるだろうと思うんですが、その辺についての御意見はいかがでしょう。

山崎委員

近隣の学校が、それぞれが特色があるけれども、比較的小規模であるという場合に、学校は独立させながら連携という形でひとつの総合性を実現したらどうかという考えは当然あります。例えば幕張総合とか、あるいは神奈川県の数配置の学校等を見ていると、どちらも大規模同士であるとお互いが成功しやすいんです。生徒が行き来できると。ところが、小規模同士でやった場合には、なかなか理想どおりにはいかないという例が見受けられます。そもそも生徒の学習意欲であるとか、そういう小規模校に集まってくる生徒の実情等からして、隣の学校までわざわざ出かけて、より多くを学ぶというようなことはなかなかできにくいというようなこともありまして、現実には、労多くして益少なしという面もあります。それをさらにクリアする何らかの方策があればまた別なのですが、やはり現実問題というのを考える必要があると思います。

福田会長

なるほど。非常に貴重な御意見だと思います。小規模同士の場合の連携というのは非常に困難であるということ、これはひとつの現実じゃないかと思います。もうひとつ、私個人の意見ですが、残しておかなければならないのは、本当に進学したいという場合、編入試験もきっちりやって、商業科に進んだ方が普通科にも行けるというような制度というのは、やはり県としてもぜひ残していただきたい。あるいは、それをある程度保証していただきたいという気はいたします。た

だ、それがモラトリアムを伸ばすだけで、あいまいな気持ちでもって、ただ移りたいというのであれば、試験の厳密性とか公平性というのが担保されなくなります。したがって、これはあくまでも、厳しい、公平な目で、能力のある、本当に能力が高い人たちが移れる、進路変更ができるという可能性を全体として担保していく必要はあるのではないかという気はいたします。それは連携に加えて、もうひとつの方法であろうと思います。他に御意見はないでしょうか。

吉岡委員

高校1年から2年に上がるときに、それぞれの生徒の希望によって進路を変えていくというような話かなと思うんですが、その前にやはり「中学における進路に対する指導」というところから入っていかないと。職業系には工業とか、水産とかいろいろありますけれど、そういう学科に入って、入ってから見直しなさいというのも、何か問題があるんじゃないかという気もいたします。そういう意味では、中学1年・2年・3年の中で、職業に対する意識の植え付けというか、それをもっとしっかりとやる必要があるのかなと思います。確かに、高校1年生の段階では、なかなか次の進路というのは見えてこないと思いますが、やはりそういうことが必要んじゃないかなと思います。

福田会長

わかりました。ちょっと商業に時間をかけましたけれども、後でまた同じような議論が出てくるかと思しますので、次に進めさせていただきます。
工業系の学科について、説明願います。

高校教育課長

それでは、協議資料の7ページを御覧ください。
職業系学科全体において、「地域を支える人材の育成」という視点は非常に高くなっております。今福井県では、私学を含めて、大体1,500人から1,600人が地元で就職しております。県立では1,200人くらいです。
工業系学科に関してですが、参考資料2の8～9ページをあわせて御覧ください。9ページに今年の各工業高校への志望倍率を記載しておりますが、商業に比べてやや低くなっております。これは、この学科は、理論と実践がはっきりしているためではないかと考えております。また、非常に多様な名前の学科になっております。商業科と比べると志望者数は100人以上少ないのですが、商業科が10学科であるのに対して、工業科は15と、多彩な学科名になっております。教育内容はかなり似ているところもありますが、各高校において、こういう学科名をつけています。進学と就職に関しましては、商業科とは反対に、就職の方が6割、進学が専門学校を入れて4割。この学科は、福井県のものづくり、製造業の人材を支えている糧にはなっています。
論点といたしましては、工業系学科において何を教えるべきか。いわゆる旋盤や溶接のような基礎・基本に加え、新しいハイテクの実態をどう教えるかというのが大きな課題になっている。そして、一番基本にある「ものづくりの誇りを持つ人材をどう育てるか」ということもあります。もう一点は、工業系学科を大きく区分いたしますと、機械・電気・化学・建築・土木・情報・デザインに分けられますが、今後どのような学科が求められてくるかというような点を御議論賜りたいと思います。以上です。

福田会長

難しい課題だと思うんですが、先ほどの商業とは逆転していると。要するに、就職が6割占めているということがひとつの特徴であります。それから就職者の70%以上が建築・製造業に従事しているという特徴がある。地域の産業の底支えをいただいているということだろうと思います。それだけに、商業と並んで福井県にとっては非常に重要な人的資源であろうと思われるわけです。

また、やはり進学者も、ある程度多いわけです。進学率は37%くらいでしたか。商業系ほど高くはないけれども、結構高い進学率を持っているという特徴がございます。日本の将来を考えたときに、日本は、やはりものづくりで支えられてきたことは間違いのないわけでありますが、ものづくりに対するこだわりを持つ生徒、職業人としてのプライドを持った人間を育てるためにはどうしたらいいのかということ。それから、資料によると15の学科がありますが、内容を見るとかなり似ていて、同じようなものじゃないかなと思えるのに名前が違うというのがございまして、ちょっと素人にはわかりづらいということがあります。こういう学科名は、教育内容によって統一していく必要があるのではないかとということも感じられます。それから学科がずいぶん細分化されているようですけれども、当然学級数が少なくなってくるわけですから、一定の学級数、少なくとも2クラスくらいを確保しようとする、やはり、もうちょっと細分化された学科を見直す必要があるのではないかとというようなことも言えると思います。それから、参考資料2の8～9ページをみると、それぞれの学校で、2つないしは4つ程度の学科名を持っています。このように分散して持つことが果たしていいことなのかどうかということもあわせて御議論願いたいと思いますが、例えば、拠点校というような形でもって、全部の学科をそろえたような学校をひとつ作って、その周囲には主要な学科だけを持っている学校を配置するとか、いろいろなことが考えられると思うんですが、その辺の可能性についても御議論願えますでしょうか。

藤井委員

今会長がおっしゃったように、学科が少し細分化しすぎているんじゃないかということは、私も感じます。高校に入学するにしろ、就職するにしろ、自分がこれでやっていくんだという思い通りの学校に入れるわけでもございませんし、学校に入ったからといって就職できるわけでもございません。ということは、やはり高校教育においては、ある程度の幅広さみたいなものを持たせていかなければならないのではないかと思います。福井県はものづくりと申しますけれども、ある特定のものづくりだけを専門的に高校で指導するということになると、かなり限られてくるんじゃないかと思えます。これはいろいろ議論されているところですが、例えば、ひとつの特定のものづくり「を」指導するというのと、特定のものづくり「で」指導するというのでは、かなりニュアンスが違ってまいります。特定のものづくり「を」指導するということまでも高校教育で行わなければいけないのだろうか。それよりも、もう少し広く、特定のものづくり「で」指導して、たまたまひとつのものづくりを学んだけれども、結果的にはどの方面に進んでも役に立つと、有効であるというような考え方もあるのではないかなと思います。そうすると、やはり、少し狭めた形での在り方より、会長がおっしゃったように、少し広げたような形で、ということの方が、これからの生徒のニーズに合っているのではないかという気がします。それから、現在の職業系高校の3年生の80%が、自分の選んだ学科に満足していると答えているという点も評価されているのではないかと思います。

福田会長

ありがとうございました。他に、どうぞ。

瀬尾委員

これは、ネーミングのこともあるのではないかと思います。10年ほど前に、大学が、3Kというか、学部の名前によって生徒が来なくなるということで、ネーミングを新しく、かっこよくされたことがあります。高校の方でも同じことではないのかな。実際、保護者としても、子どもが行きたい学科、その学科で何の勉強をしているんだと聞いてもさっぱりわからない場合が多いんです。農業関係は、「農」という文字も消えています。それはやはり、そういったことも関係

しているのではないかと。私も、先ほど意見がありましたように、学科を細分化しすぎているという面はあると思います。もう少しおおらかなくくりでやっていただきたいと思います。

福田会長 今必要な学科は大体そろっているのでしょうか。こういうのがまだ足りないのだけれども、ということはないのでしょうか。そういう点も含めていかがでしょうか。必要な学科はそろっているのでしょうか。現在のニーズにも合っているのでしょうか。

津田委員 工業系の高校をいくつか回らせてもらって、工業関係の学校をどうしたらいいんだと聞いたときに、いわゆる機械・電気・建築といった大まかなことはどの学校も決まっているということでした。

カリキュラムについてですが、例えば電気科のある学校は県内に6校ぐらいありますが、学校の中の授業だけでなく、県内の電気を専門にする子どもたちを夏休みにでも集めて、スペシャリストを呼んで、1週間ほどの期間、ハイレベルな研修を受けるとか、または、建築なら建築のハイレベルな研修をある期間に集まってすると。そういう中で、僕はこういう系の企業へ進みたいとか、もっと大学へ進みたいとかいう気持ちも起こってくる。工業系の小さな学校がだんだん人数が減ってくる中で、そういうふうカリキュラムを変えていく必要があるのではないかと思います。

今、武生工業などは、名人ではなく「達人」という目標を学校で取り上げています。何かの達人になるんだという意識をはっきり1年生のときから持たせると。これに向かって子どもたちが、就職するとか、達人になるためには大学に行かなくてはいけないとかいう方向に行っていると。やはり工業系において必要なことは、学校で目指す特色があるのが1点、それから、県内の全部の子どもたちが、同じ方向のハイレベルな授業を受けられる、そういうシステムがこれからは必要ではないか、そういうところにお金を使ってほしいというような意見を、私は何回も聞きました。学校の古い機械ばかりでなく、どこかの企業の応援をもらって、福井県内の専門学科の子どもたちを全部集めて、夏期講習などをやっていくといいという未来像を語る学校がいくつかありました。

福田会長 今の意見は非常に重要な意見だと思います。裏返しで言いますと、いろんなところにいろんな学科があるために、専門性を維持することが非常に困難になっていると。そしてそれは、ひとつは教える側の人数ないしは能力の低下と不足、教えられる方の人数も限られて小さくなってきている。ということで、両方とも集中したハイレベルな教育を受けるということが必ずしも平等になされていない。だから、夏休みとかそういうときに集中的なことをやってでも底上げをする必要を感じているほど切羽詰っているということに解釈してよろしいでしょうか。

津田委員 子どもと一緒に、教員も研修に参加すると、両方にとってよいということは聞いております。

福田会長 ということは、今の状態では、教える方と教えられる方、両方とも量と質の点で問題があって、それを解決するだけのなんらかの工夫が必要であるという御指摘であり、非常に重要であると思います。

高校教育課長 学科名に関しましては、平成10年頃に各学校で創意工夫していただいて、先ほど瀬尾委員が言われましたような側面もあり、このような対応になっていると

ころがございます。もう1点、参考資料2の8ページの説明させていただきますと、情報・建設科、都市・建築科、これはコースに分かれております。35人ですと15人とか17人とかで分かれる形であります。その上の情報システム科のようなものは、1クラスにまとまって授業をしております。その時点でも小規模化の中で学科が6から5とか4に少なくなった中で、こういう学科もできているというのが現状です。

福田会長

ありがとうございます。それぞれに特徴を出そうと努力された結果であると理解できますが、その結果として、一般に人には理解できなくなってきているということですね。

橋詰委員

各学校の学科名というものの特色を出すということは大事だと思います。もう少し、選択・集中というものをきちっとされた方がいいと思います。各高校に同じような学科、カリキュラムを置くよりも、各高校の特色を出していった方がいいでしょう。各高校間の連携を図れば、多様な技術を身に付けることができると思いますので、各学校の子どもが減る場合はそういう特色を明確にするということが大事だと思います。例えば、Aという高校は自動車の専門的なことを集中してやる、ある高校はIT関係を集中してやるかというような特色を持たせた方が少子化には対応できるかと思います。そうすると、通学に不便だということもありますが、これからの少子化を考えた学校設置の中で、寮なども考えられるし、一定期間、たとえば1か月間だけやる場合も寄宿舎を利用してやるということも可能で、そういう柔軟性もとれると思います。

もうひとつは、これからの工業高校を考える場合は、県内の産業界との連携をより強くしていくことが非常に大事だと思うのです。この学科の生徒は、おそらく就職を最初に考えると思います。福井県の製造業を中心とした産業界というのは、ある意味では、工業系の学生がはかなりの部分を支えていると思います。そう考えますと、今やっていると思うのですが、より各企業との連携を図って、企業の技術者が学校でいろんなことを教えることや、あるいはインターンシップみたいなものをより拡充して、企業で教えていくということですね。地域の企業と学校が連携して技術系の学生を育てていく土壌を作っていくことが、福井県の産業界にとっても非常に重要なことだと思うので、より、そういう連携を密にすれば、工業高校の魅力が高まっていくと思います。

福田会長

ありがとうございました。どうぞ。

馬場委員

前回の渡辺委員の御意見が、資料4の20ページに書かれていますが、私はこれが、もう一度私たち自身が振り返らなければならない大きな課題ではないかなと思っています。というのは、先ほども委員の方が言われたように、中学時代から高校にという過程を経て高校に入るわけですし、その段階では、正直申し上げて、点数で分けられるのです。あなたはどこの高校に行きますか、ここの高校がこういうレベルですよ、というひとつの現実的なものがあり、今の制度の中では逃げることはできないわけですし、その中で生徒さんなり親御さんは、高校を選択していく。私もそうでしたし、そうになっているのが実態だろうと思います。その中で、生徒が成人して社会で生きていくために、どう高校時代を過ごすべきなのか、何を学ぶべきなのか、このところが私はひとつの大きな課題であると思っています。

そういう意味では、まだ人間として未熟である、その未熟さというものを高校時代の中で、しっかりと教育といいますか、人間的な教育、そして社会的な教育

を押さえておかなければならない。そうした上で、自分が生涯の人生を歩む中においてどう職を身に付けていくのか。例えば、農業高校を卒業しても農業に携わって生活が営めるといふ環境があるかという、現実の問題として非常に厳しいです。であるならば、農業に関わったというものを将来どこかで生かせる場面は、私は絶対あると思うのです。それは自然との交わりであつたり、食べ物を作るといふ過程の中であつたり。そして、3年間の中でどこに就職するかという選択といふのは、1年間ぐらいしっかりと考えられる期間があつてもいいのではないかな。

私は普通科でしたが、今何の仕事をしているかという看護師です。卒業してから生活していくために看護師の道を選びました。そういう道を選んできました。私の同僚の中にも農林高校を出た人もいます。看護師を選んだ人はたくさんおいでになります。ある高校で、一定の学力と人生的な学力をしっかりと教わって、その中で幅広い選択肢があつて、どれを選んでいくか、そういう方向性の方がひとつには望まれるのではないかなという思いがあります。

今、工業高校の場合、いくつもの高校が県内に分散している。地域型の設置をするという流れがあつたのだらうと思います。その中で重複した学科があつてもそれは当然、と言つたらしかられるかもしれませんが、大野は大野での、春江なら春江という地域性の中での科目を設定してきたのだらうなと思います。今、将来的に民間の企業の皆さん方の協力も得ながら、または大学の先生の協力も得ながら、機械なりの設備投資しながら、実際の現場とはこうなんだよ、ということのひとつの学科の中でしっかりと連携をして教えていく。このことも極めて必要な課題であると思つています。

ただ、高校を出たから即戦力だという考え方は、危険すぎるのではないかなと。私も、高校出たから看護師の資格を取れたわけではございません。今の企業といふのは、即戦力を言葉にしますが、企業そのものが人材を育てなくなったので、即戦力型を望んでいるところに行き着いています。高校といふのは、やっぱり高校なんだ、企業といふのは企業なんだというひとつのゾーンが、ある程度あつても当然という具合に思つています。

今、親御さんの中にも学校の給食費を払えない方が出ています。ひとつの地域で学校をなくすことになると、交通費の問題、家計の問題、いろんな問題が及んでくるということも考えておかなければならないのかなと。また、工業高校に入つて途中で変更がきかないのか、これはあつてもいいと思うんですね。普通高校に変われるような制度も作り出さなければいけないのかなと思います。私たちは、もう少し生徒中心型の考え方を持たなければいけないのかな、と思つています。

福田会長

どうもありがとうございました。今の御意見はわからないではないですけども、やはり学生の立場だけではなくて、それぞれの職業高校というものがある限り、それぞれの目的性を持って設置されているわけですから、ある程度の目的といふか、そういうものに沿つたものであつてほしいと。そうでなければ、何もやらなくていいじゃないか、それは確かにそうだと思うんです。人生の中で、いろんな選択肢があつても僕は然るべきだと思うんですが、だからといって、専門性を否定することにはならないように思つています。他に何か御意見ないでしょうか。

金井委員

今、この資料の8ページの設置学科と教育内容をつぶさに拝見しましたが、正直申し上げて、非常に高度な技術名をそのまま学科名にされている。このまま大学の工学部あるいは理工学部系の学部の学科名に転用できるんじゃないかといふ学科が非常に多いと。これは先ほど瀬尾さんがおっしゃつておられましたよう

に、今から10年ほど前に、大学の学部あるいは学科の再編が非常に加速した中で、それぞれ大学が特色を出すために、こういった難しい名前の学科が非常にたくさん生まれ、これに県立高校でも関連されたのではないかと考えています。

工業系学科で何を教えるべきか、どのような人材を育てるのかということを考えてきたときに、あくまでも高校生が工業というものを学ぶ上では、原点回帰ではありませんけれども、ベーシックといわれる電気・機械・建設といった、いわば昔ながらの学科名で、その中で生徒たちが科目を選択して、エンジニアというものにより魅力を感じるような授業科目の組み立てというものが、実は大事な時期になってきているのではないかと。確かに、中学校から高校へ進学するときに、自分は何科に進んで将来何になるというような明確な進路に対する目標を持っているかということ、これは非常に難しいように思います。実際、大学に進学する段階でも、自分は電気電子工学科に進んで将来何になるということところまでの明確な将来設計を描けている学生というのは、皆無と言ってしまってもいいかもしれません、率にすれば1桁に近いのが現状でございますので、県立高校のことを考えたときに、やはり学科とカリキュラムの見直しをして、本当にこの福井が、あるいは社会が、また世界、産業界が望む知識、技術、技能を身に付けた生徒さんをお育てになるべきではないかということを思うわけです。

福田会長

どうもありがとうございました。それでは、時間の都合もございますので、次に移ります。農業系学科について説明願えますでしょうか。

高校教育課長

それでは、資料1の7ページを御覧いただきたいと思います。あわせて、参考資料2の6～7ページに福井県の農業系学科の現状の資料が入っております。

これは前にも申しましたが、福井県は農業系高校の割合が全国と比べても、近県と比べても、5%という高い数字になっております。また、参考資料2の7ページでございますように、今年の農業系の第1志望倍率も1.16と、福井県の中では高いものになっております。そうした中で、入学してくる生徒が非常に多様化というか、基本的には非農家、農家じゃない生徒さんが大多数になっております。どういうことかと言いますと、なすびの苗とピーマンの苗がわからないというような、そういう経験がない生徒さんという意味で、農業に漠然とした関心はあるんですが、実習などは苦手だという生徒が増えてきているところがあると聞いております。また、もう1点は、農業の後継者が非常に少ない状況である中で、関連した食品関係等は十分ありますが、他の学科と比べると、就職先と学習内容の関連性は薄くなっているというところがあります。

生徒数が減少する中で、本県農業を支えるスペシャリストを育成するための学科の配置、教育内容がどうあるべきか。もう1点は、本県は兼業農家の率が全国一であり、これが大きな本県農業の特色となっておりますが、このことを踏まえて、農業系学科にはどのような在り方があるかが問われております。よろしくお願いたします。

福田会長

どうもありがとうございました。農業系においても進学率が大体40%になっているというのが資料2の15ページにあります。ここもやはりいろんな難しい学科名が付いていますけれども、工業科と同じような理由によると思います。やはり生徒数が減少していると。しかしながら本県は農業県でもあり、それを育成するためにはどうしたらいいか。教育内容はどうすべきなのか。また、兼業農家が多いということで、学科はどういうふうにすべきか、というのが論点2として問われているわけでありまして。この辺について御意見を賜りたいと思います。い

かがでしょうか。

兼業農家が多いということは、メインの仕事は他のところでやっておられるということですから、これはやはり、幅広くいろんなことを勉強できるような環境が必要であろうということになるのでしょうか。

瀬尾委員

専業農家なものですから、関係がありますので一言申し上げます。現在、就農者が少ないというのは当たり前だと思います。社会状況から、高校卒業して、即、家の家業につくというのは多分少ない。大きく法人化して会社経営しながらやっているところでないと就農しないと思います。専業でやっている我々の友達などを見ましても、農業系の学科を卒業してやっておられるというのは非常に少ないです。大学を出たり、一応企業に入って就職して、帰ってきてじゃあ農業をやるのか、という人の方が多いです。そうした人の方がいろんな知識などを農業につき込めますし、いろんな状況、社会を見てきている、いろんな経験してきているという人の方が、私自身もいいと思いますし、その方が農業にプラスになるという思いをしています。

では、高校の農学科は何を教えるかということなんですが、工業も商業も一緒だと思いますが、やはり社会的な、社会生活する上での基礎的な学力ですよ。そういったことをしっかり身につけて、自分の好きな道に進んでいってほしいという思いをしています。地元の若狭東高校の話聞いておりますと、何年前からか、理容師の資格を取るためには高校卒でなければダメだということになりました。そのときから、とりあえず農学科へ入って卒業して、理容師の専修学校へ行って理容師になるんだという人が多いということを知ったことがあります。私の甥もそうですし、資料の15ページにもありますが、進学という中でも専修等の子が28.1%ということで、進学進学といっても、そういったところが多いということです。三重県が、理容師になるために資格が高校卒になるということで、その前年度くらいからですか、高等学校に理容学科を設置すると。最初何のことか分からなかったんですが、理容師になるためには高卒程度が必要だという条件になったので、改めて理容学科を作ったといったことを聞いたことがあります。そういったことを聞きますと、福井県は、学科に関してやはり遅いんですよ。先ほど、津田先生も言われましたように、専門の先生も用意しなければならないということですが、そういった状況も踏まえて、希望する生徒が多くなれば、そういった学科を導入する道順、方向性のある程度作っておいたほうが良いという思いはしております。

福田会長

ちょっと今までのご意見とは違ったご意見で、資格が必要ならばその資格を取れるようなことを高校として用意すべきであるというご意見ですね。

瀬尾委員

その状況に応じて、特に理容師などは、法律が変わったことによって子どもたちも高校を卒業しなければならないと。そういったことがあれば、理容学科というのも考えても良いのではないかなということです。

吉川委員

前にも申し上げたのですが、職業を決めるときは、職業への興味から始まり、人生観とか価値観とか目標というものをバックに職業観が出てくると思うんですね。しかし、高校では、やはり職業能力というものが、就職する生徒にとっては大事だと思います。

これはアンケートでもはっきり出ていますが、1、2年の時には、友達とか部活とか先生とか、非常に楽しい学校生活を送るのですが、3年になると、特に就職する生徒ははたと困ってしまうんですね。自分に果たしてどういう職業能力が

あるんだろうと。私たちとしては、学校を考える場合に、社会が求めるものがあるような教育内容といますか、そういうことも必要だと思うんですね。先ほどもおっしゃられた、もともと専門的なことを何かやっていたら、得るものがあるということもひとつだと思うんです。けれども、それプラス、就職する生徒には、やはり職業能力をつけてやるという考え方も大事にしてほしいなということを思います。だから、農業については、農業だけでそういうことができないのであれば、他の学科とあわせて若干考える学校もあってもいいのではないかと。前の会議でも出ていましたが、総合学科高校といますか、あるいは専門学科で他の学科の科目を置くというようなことを考えるのが、生徒にとってはいいのではないかと思います。

福田会長

職業高校を論じるときに基本的なものの考え方やコンセンサスだと思うのですが、職業学校は、職業としてのひとつ基礎であっても、プロフェッショナルを養うための趣旨であるということが絶対の大前提であることを忘れては困ると私は思うのです。その中に、いろんな人生の中に選ぶマルチプルチョイスの方向性があってもいいし、時期的余裕があってもいいと思うのですが、しかしながら、プロフェッショナルとしての基本的な技能・技術や考え方をそこでしっかり勉強してもらおうということは、やはり、毅然として、大人が子どもに対して指導していくべきことだろうと思います。確かに、広く子どもの能力を自由に伸ばしてやる、自由を大切にすることは、一方では大切であることは論を待ちません。しかし、決してそれはファジーの代名詞でないということでもあります。ほかに意見はないでしょうか。

杉田委員

職業系の中でも、特に農業については、世界的な食糧の問題や、日本の今の食糧生産が非常に少ないという問題などいろんな問題がある中で、特に、福井県は農業県で、米の主産地であるわけで、そういう意味でも、農業の大切さを子どもたちに積極的に教えていかななくてはいけない。現状を考えると、農業に就く子どもたちが少ないのですが、今の国の政策なり、福井県の里地・里山問題なり、いろんな政策も考えますと、今後とも農業の勉強をする機会を確保していくのは重要です。他の職業を経験してきた人が農業に回帰してくる、その人たちの勉強の場を提供するなど、幅広い農業を勉強する機会を準備する考え方が大切ではないかと。

各高校が競って学科をいろんな名前を付けて、それぞれ学校が知恵を絞って作った結果、よく似たものが小さくばらまかれてしまったことの不効率さと言いますか、まして、現在のように子どもたちの数がどんどん減っていく、志望者が減っていく中で対応するには従来のままでは対応仕切れないのは、誰がみても明らかであります。そのような中で、多様化する需要にどう対応するか。非常に一見相矛盾した形に直面しているのです。どこかにある程度の形にまとめていかななくてはいけない。その中で多様な対応を考えていくのは、柱として考えざるを得ない。細々としたものが各地に散らばった形で置いておくのでは、どれもこれも機能しなくなると考えます。従って、基本的な柱はしっかり考える必要があると考えます。

福田会長

それはひとつの拠点校みたいなものですね。そのところに必要な各学科を置いて、十分にスペシャリストを養えるような措置が必要であろうという御意見だと思いますが。

杉田委員

ただその場合、心配されるのは、安易にそれぞれのたくさんの学科を作って、

機能していくのかということの見極めが大事です。

福田会長 工業も同じですね。

四戸委員 似たようなこともあるのですが、農業自体は、環境工学を含めて、今最もニーズの高い学科だと思います。食糧問題を含めて、高校教育としての農業高校の在り方と、農業を普及させるための教育機関としての受け皿とは分けなくては行けないのかと思います。

それと同時に、工業高校と農業高校の境目がずいぶん低くなっているように感じます。例えば、農業土木というと土木・建設とかなり近い分野があるだろうし、環境工学では、環境問題を工業の方からアプローチする場合と農業の方からアプローチする場合の両方がある、むしろ、両方が合体してやらなければならない部分の方が多いのではないかと。バイオテクは生物学系と工業系とがあり、バイオエタノールができるかどうかわかりませんが、そのような産業にマッチしていく。そうすると、もう少し農業高校に入学していく意識を高めていくことができるのではないかと。将来性のある職業に就けるという意識があれば、農業高校に対する希望者が増えていくだろうと思います。農業に対する期待というのは永遠の課題であり、人類生きている以上農業のお世話になるのですから、重要な高校だろうと思います。もし仮に、再編というものがあれば、農業高校を一本化するのではなく、個人的には、農業と工業を一緒にした方がうまくいくのではないかと、このような分野がモデルになるのではないかと考えます。

福田会長 総合産業学科ということでしょうか。

四戸委員 それが総合産業学科ならば、それも一つの方法かなと考えます。

福田会長 工業の方も、機械と電気とエッセンシャルなものに特化したものも見方もひとつの手でないでしょうか。ただし、それ以外のものも学べるような、しかしあれもこれも学べるのではなく、ある程度絞り込むべきであると考えます。

橋詰委員 現状の学校の在り方とか教える内容については、改善する必要があると思います。農業の大切さは、今述べられたとおりだと思います。福井県は生産県ということで、どうしても教える内容が「生産する」、生産を中心とするカリキュラムで教えられていると思うのですが、農業という概念は、今は「作る」ということから、幅広く流通を含めた食糧問題を含めた幅広いものになっています。その概念を教育の面から見直していく必要があると思います。そうした内容に、学校も教える内容も変えていくべきと考えます。

農業系に入ってくる生徒は非農家の生徒が大多数を占めているということですが、農業を目指すのではなく、農業を幅広く捉えている生徒かもしれません。そのことを考えますと、非農家の一般の学生が入れる学校に改める必要がある。農業を作るという視点でなく、食品とか、安全面とかの内容に作り変えていくのが社会のニーズに合う学校と考えますので、私は農業系学校の内容そのものに改善、メスを入れていくべきだろうと考えます。

福田会長 ありがとうございます。完全に社会とのミスマッチがあるのではないかと。もっとマッチングをうまくすれば、希望する生徒も増えるはずだとの意見だと思います。

それでは次に、水産系学科の説明をお願いします。

高校教育課長

それでは、資料の 8 ページを御覧いただきたいと思います。海と陸ですが、現状は農業系とよく似ています。福井県には小浜水産高校という 1 校だけありまして、数年前までは志望倍率はかなり低かったのですが、ここ 1、2 年は上がってきています。参考資料 2 の 1 2 ページを御覧ください。食品工業は 1. 3 6 倍で、従来より上がってきています。学習内容と職業がうまく結びつかないという点は、農業系と同じ問題であります。論点も基本的に似ているのではないかと。小浜水産高校は、日本で一番古い水産高校でありますし、伝統のある高校で、福井県の特徴のひとつと考えられるのではないかと思います。よろしく願いいたします。

福田会長

農業系と似ている点が多いわけですが、学科については社会のニーズへの対応とか、生徒の目的意識の高揚を図るために、内容を見直す必要があるかもしれない。例えば、先ほどから出ている総合産業学校や総合産業学科というものですが、水産業にだけ限定せず、広い分野の学習ができる環境の整備が必要であるかもしれない。一方、福井県は海岸線がずいぶん長く、スペシャリストの養成を福井県独自で図る必要があるかどうかは別問題であります。

県立大学には生物資源学部がありまして、それは水産業とも農業とも関係しているわけですから、いずれにしても高大連携も考えていかないといけないのではないかと。本当に優秀な生徒は、優先枠みたいなものを大学に設けて、積極的に登用を図ることも考えていいのではないかと、そのような気はします。その他のご意見を頂戴したいと考えます。

藤田委員

農業と同じ第 1 次産業ですので、日本をしょって立つような大事な学科だと思うのですが、水産高校に入ってくる生徒につきましても、先ほどからお話がありましたように、自分で希望するよりも、中学校で輪切りになって水産高校へ来る生徒が多いことは確かな点です。ところで、皆さんも新聞等で御存知だと思うのですが、海洋環境のアマモマーメイド・プロジェクトとか、そのようなものを一般市民の方々とやっている生徒の姿を見ますと、本当にいきいきしています。また、さば缶を作るとか、越前クラゲのクッキーを作るとか、外来魚の缶詰をつくるとか、いろんな工夫をしております。特にさば缶は学校祭等で売っているわけですが、行列ができ、地域の人たちが購入しています。やっている生徒は楽しく、意欲的にやっている。

どの学科でも、どの専門学科でも言えると思うのですが、自分たちが望んでいなくても、その学校で専門学科を学ぶことによって、生きがいを見つける子が相当いるのではないかと、今、水産高校を見て思っています。課長からのお話がありました。今年、食品工業に相当人気が出てきたというのは、今のがんばっている様子を見て、行くんなら、そこへ行きたいと思って希望した生徒が多くなったのではないかと。輪切りの中でも、行くのならそこへ、となった形かも知れません。

農業でも水産でも食の関連する学科でありまして、私はいつも思っているのですが、特に水産学科では、「魚を取ってくる」「育てる」「それを加工する」に加えて、もうひとつ、「調理する」が大事ではないかと思います。水産学校の中に農業関係が関連する、調理の部分は家庭科の部分になるわけですが、調理の専門学科を水産高校に設置すると。例えば河豚を解体する資格が取れる、そこで学ぶことにより、寿司職人のたまご、板前のたまごを作り、卒業したら京阪神に行けるなど、調理の部門を作ることによって、夢が広がっていく。採る漁業につきましても、マグロ取りにハワイ沖まで行っているわけですが、そんな遠くでなく、もっと日本海の近くできちんと魚を採ることを考えるべきではないかと。観光

漁業におきましても、非常に海岸線が長い中で、都会の人が釣りに来ますし、そうした観光部門での学問・学習が必要ではないかと考えます。身近な採る漁業、小浜には県の栽培センターがありますので、そこの連携が出来て、十分な学習が出来る部門ももっていますし、地元大学との連携とか、また、環境的には水産高校がこれから進んでいくためには恵まれている。内容を今のままではなく、もう少し変えていくことが大事ではないかと考えます。

福田会長

非常に建設的な御意見であると思います。私も海釣りをするのですが、船上で船頭さんがきれいな手さばきで、魚を三枚におろし、刺身を作ってくれるのは、本当においしく、感激したことがしばしばでありました。新しいものを加えていくのは、確かに面白い発想であるし、積極的に考えるべきことであろうと思います。それから農業でもありましたが、リターンする方に対する農業の在り方を考えるのも、新しい視点でありますし、新しい視点を盛り込んでいくのは大切なことだと思います。観光と結合、見せる水産の姿勢に立てば、まったく新しい分野が開けるので、水産をどうするか、困った問題だけでなく、どう現状で解決していくかの工夫も必要であります。他に意見はありませんか。

馬場委員

意見というより、お尋ねしたいのですが、就職された若者の離職が、大きな社会問題になっていますが、福井県内において、就職されて離職されていく度合は、数がわかりましたら、教えていただけないでしょうか。

高校教育課長

全国の高校卒業者の離職率は、就職3年目で45%ぐらいです。福井県は、約42%であり、愛知県が一番小さいのですが、それに次いで、福井県の離職率は低い方です。1年目において21%ぐらいで、高校教育課としては、これを何とか20を切るような形にしたいということで、いろいろな形で、各学校に御尽力を賜っている状況です。

馬場委員

離職率は3年間で42%ということですね。会長がプロフェッショナルという言葉を使いましたが、確かに専門学科において、専門の人材を育成していくことは重要であると思うのですが、今、離職率を聞かせていただきましたが、それだけの数、そういう気持ちで就職したにもかかわらず、離れていくことをもう少し考えていく必要があるのではないかと思います。

労働局の調査によると、若者のフリーターの数は福井県内で7,000名～8,000名ぐらいといわれています。なぜそのような状況になっていくのかを考えますと、高校の時代、大学の時代、専門学科の在り方を含め、少し荒っぽい言い方ですが、メスを入れていかななくてははいけない。こういう議論の中で、どう対策を取っていくのかということと、企業側・社会の受け入れをどう考えていくか。そうしたことを考えていかないと、やっぱり42%という離職率の数は果たしてどうなのか。親は非常に不安でしかたない状況に至る。先ほどの皆さんの議論の中で、福井の産業、福井の企業、福井の生産というのは、非常に前途が暗い状況になっていくのではないかと、という思いがしております。

福田会長

確かに、離職率42%というのはびっくりするほど高いですね。だから、どこに問題があるのかをはっきりさせていく必要がある。例えば、社会の受け入れ側に問題があるのか、受ける方・入っていく方に問題があるのか、高校時代の学んだプロセスに問題があるのか、人間性の育成に問題があるのか、教える内容にミスマッチがあったのか。これは、別個の問題として是非考えていかなくてははいけない。おっしゃるとおりだと思います。

それでは、先に進めさせていただきます。時間があれば、リターンします。家庭系学科について、説明をお願いします。

高校教育課長

家庭系学科と厚生系学科はあわせて説明いたします。協議資料の8ページを御覧ください。家庭系学科は、ライフスタイルといいますか、生活に直接結びつく衣食住・保育等を学ぶ学科です。三国高校、美方高校、勝山南高校に家庭系学科がありますし、密接な関係を持つ学科として、福井農林、若狭東に生活科学があります。女子生徒が8割おり、学んでいるところです。保育を含め子育て関係もありますが、特に、保育士や調理師等の資格を取るために、卒業後専修学校等へ進学する生徒が多く、進学率がかなり高くなっております。食育先進県、ファッション繊維王国といった本県の独自性を踏まえ、学科の配置、教育内容はどうかを御議論を賜りたいと思います。

もう1点、厚生系学科と申しますのは、福祉関係でございますが、これは大野東高校に福祉教養科、丹南高校の総合学科に福祉コースがあります。福井県でいたい4,100人の介護福祉士の資格を持った人がおられ、そのうち2,800人ぐらいが勤めておられますが、離職率が高く、3年目で7割の方がやめられるとのことで、厳しい労働条件が関係していると考えられ、高齢化社会の中で非常に大きな課題があります。また、介護福祉士の資格の取得条件が大変厳しくなっています。まだ案の段階ですが、受験資格を得るためには、学校において従来の34単位1,190時間から52単位1,820時間を履修する必要があります。このような現状の中で、本県の福祉人材の育成のため、学科の配置、教育内容はどうか、御議論いただけるとありがたいと思います。以上です。

福田会長

いずれも女子が多い。資格が必要であることは共通しています。社会福祉士や介護福祉士の方は大変しんどい仕事で、長時間の重労働で、賃金がそれほど高くないですよね。周りから見ても、よくおやりになっている。感謝するほどのものです。離職率が高いのはうなずけるところです。これでいいのかということも含めて、御議論願いたいです。

三上委員

新聞等で見ましたが、資格取得等で、子どもたちが感動してとらえているのは大変素晴らしいことです。自分の生き方や道を発見するということは、先生方もそういう生徒をたくさん作るというか、育てるというか、誇りを持ってやっていただきたいと思います。

話は置きまして、厚生系学科ですが、私は、衛生看護科をなくしてきた校長として、今になりまして、あの状況でなくしてよかったのか、あるいは、なくさなかった方がよかったのか、悩んでおります。といいますのは、時間数の問題なんです。当時、看護師は高度な技術・高度な知識を修得しなくてはならなくなりました。ちょうど、看護師の不祥事が起きた時代だったのです。そこから、1,800時間を持ってくるということで、高校3年間では出来ないという話をしたわけ。高等学校で1,800時間を消化するには、当然、1週間の授業時間数が減っている状況ですから、衛生看護科は3年で出来ないなら、5年制をひかなければならない。専門の先生を更に採用しなければならない。こういう状況の中であったのです。厚生系の福祉教養科は、果たして、福祉や看護の資格を持った、教えられる先生を採用しているのか。このあたりが大変心配ではあります。福井高校は衛生看護科を持っています。福井県で残ったのはそこだけです。看護師も高度な技術や高度な知識を持たなくてはいけない。そこで、普通科の生徒の充実を考えたわけ。普通科を出て、日赤や県立、あるいは県立大学で看護師を作っていく。普通科の卒業生が短大等に行って準看護となる。この問題に関し

て県はどれくらいの展望を持っているのか。多分、衛生看護科の免許を持っておられる先生は、かなり定年に近いのではないかと考えます。新しい先生を補充しているのか。そういうことも考えますと、私は、福祉教養科の将来は不安であると思っております。衛生看護科がなくなるとき、校長をしておりましたので、心配しております。

福田会長 ありがとうございます。現場で実際にやっておられた校長先生からの直接のお言葉で、これはなかなか難しい、問題が多いぞというような御指摘であったかと思えます。県の方から何か御意見ございますか。後任の補充、それから指導者の養成という点でいかがでしょうか。

高校教育課長 そのとおりでございます。特に、最近は新採用が100人を切るような状況です。なかなか学科ごとにとというのは、福井県の場合にはかなり厳しい状況があります。

福田会長 福祉科は、奥越に1学科だけというのはなぜでしょうか。

高校教育課長 奥越の大野東高校が、工業だけというのが少し難しい中で、他の学科の併設が考えられたということです。

福田会長 なるほど。それにしても、ずいぶん難しい学科を持ってこられたわけですね。

高校教育課長 その当時において、一番新しい学科でありますので。

福田会長 保育士、調理師などになる場合は、高校だけで資格が取れるのはどこですか。

高校教育課長 調理師の免許は、美方高校の食物科で取れます。保育士は、卒業後に専門学校や短大に行かないと取れません。

福田会長 そうすると、これはなかなか高校だけで完結するのは無理なものです。これは生徒さんにとっても、ずいぶん負担が大きい部分がございますか。いかがでしょうか。どうしたらいいでしょうね。これはずいぶん問題が多そうですが、何かいい意見がございますか。

馬場委員 いい意見かどうかは別にしまして、日本が高齢化社会を迎えるにあたって、介護・医療・福祉がいかに大事であるかということは、みんな言葉では言いますよね。私も高校を出てから、仕事をしながら准看護学校を卒業して、高等看護学校の夜間部3年間を卒業しましたので、私も看護師なのですが、今の看護師という領域からいいますと、看護師の免許を持っている方々は、潜在的には福井県にもかなりおられるんですが、仕事に就いているかということ、実はなかなか就いていないという現状があります。というのは、夜勤があつたりでなかなか就けないということと、労働がしんどい領域であるということ。それと、保育士さんも、福井県内において、かなりいらっしゃると思うのです。ただ、少子化ということで子どもさんがだんだん少なくなってきて、保育士が活用される場所もだんだん少なくなってきているということがあります。

ただ、やはり高校でこういう学科を作ったら、最低限資格が取れるような制度にまで持っていけないと。何のために高校に設置をしたか、ただ興味を持ってもらうためということで終わるならそれも納得するのですが、そのところが大き

な課題になってくるのではないかと。金井先生の所はちゃんと資格が取れるのですよね。そういう形のなかで育成、育てていく、教育していくという地盤を作っていくことが大切なのかなと思います。これは、まさに職種を絞ってきているわけですから、密度の濃いものを持っているというよう受け止めた方がいいのかなと思います。

福田会長 どうもありがとうございました。それでは時間もございませんので、最後のその他の科目の議論に移らせていただきます。説明をお願いします。

高校教育課長 最後になりますが、新しい学科の導入についてはもういくつか御意見等をいただいております。従来の枠、例えば農業の生活科学科は、戦前後の農村婦人の中では生活改良という必然性がございました。今、時代が変わる中で、新しいものが求められるというところがありまして、論点といたしましては、まず福井県の特色を生かした学科とは何か、どうあるべきなのかということがあります。もう一点は、社会の多様なニーズがありますが、それにきちんと応えられているか、どの程度応えるべきかという観点からの新しい学科の在り方、最後に、生徒の進路希望に対応する中で、社会人としての必要な知識や技能が習得できる在り方、こうした中で、福井県の特色が出せる高校の設置、新しい学科、望ましい学科というのはどのようなものかという御意見を賜りたいと思います。

福田会長 どうもありがとうございます。専門分野においては、あくまでもいろんな可能性を残しつつも、スペシャリストの養成を図るという大きな命題を持っているということは疑いもない事実だと思うのですが、その中でいろんなフレキシビリティを持って、進学にも対応できるようなものにしていくべきであるというのが、今までの議論であると思うんですね。そのためには、ひとつの拠点校みたいに総合学科をもったものを作るのというのも手でありましょし、それから総合技術学校という名前のものもって横断的にいろんなものを学習できるものを作るというのもひとつの手かなという気もします。また、地域の特性を生かした新しい科目を持つてくるということもありますし、非常にスペシャリスト性の高いところでは、そこで完結すべきカリキュラムを組むべきであるというような御意見もございました。だいたいそういったことが今までの御意見だと思いますが、全体を通して、今までにこだわらず、全体を通して少し御意見を頂戴してから、オブザーバーの方の御意見も頂戴したいと思います。どうぞ御意見をお出しください。いかがでしょうか。これはまとめみたいなのですね。山崎先生、何かございませんか。

山崎委員 これまでの意見を踏まえての上ですけれども、やはり拠点校方式といいますか、入学当初から、いずれかの特色のある学科に分かれて、そこに所属して、その特色を学んで、スペシャリストとしての職業人を育成するという、それはやはり必要であろうと。これは福井県の職業教育の水準を落とさない、より発展させる上で非常に重要であると思います。また、すべての学校が拠点校になれるわけではないので、単独校では存続が難しい学校とかですね、生徒がかならずしも第一希望でなく入ってくる学校において、そうした生徒に対してどう対応するかという現実のニーズというものがあります。そこはやはり、水準は落としたいくないですけれども、総合性、総合産業高校といったような形でコースの中に非常に特色のあるものを持つてくる、たとえば繊維関係とかですね。そうした新しいニーズに対応できるようなものを持つてくるというような、大きく分けると二つの方向があります。今回の議論の中で、前者は学科は大枠で、あまり細かく分けな

いでということ、後者の方は、総合産業とか、総合技術とか学校の方に当てはまるのではないかと考えております。

福田会長

はい分かりました。どうもありがとうございました。今までの議論をまとめた方向から見ていただきました。他に御意見ございませんか。

瀬尾委員

すみません。先程の水産系のところで言わせてもらおうと思ったのですが、小浜水産高校の前校長先生と話をさせてもらった時に、やはり、生徒を集めなきゃいけない、人気校にならなきゃいけないんだと。そのためにはどうしたらいいかということでいろいろ話をさせてもらったのですが、全国の水産系も一緒だと思うのです。全国の水産高校は名前を変えたり、新しいマリンスポーツ学科とかを導入したりして、いい生徒を集めるためにがんばられているということを知ったのですが、山崎先生から、こうした状況について、御存知であれば教えていただきたいのですけれども。例えば、高知県の海洋高校ですかね。水産高校という名前から、海洋高校とかに名前を変える高校がたくさんあります。そういう高校は、できた時は人気があっても、2年3年経ったときにどういう状況になるのか、御存じであればお願いします。

山崎委員

私の知る限りではありますが、確かに、名前を新しく、学際的あるいは国際とかです、広くくくりで新しくネーミングする学校が増えているという事実があります。その後どうなったかということなのですけれども、あまり名前を変えなかった学校もいくつか知っておりますが、その場合は、地域校であるというイメージがそのまま残ります。私も大学で仕事をしておりまして、推薦入学等で学生を選抜しますけれども、やはり新しいネーミングをした学校の方が、カリキュラムも新しいという目で見ますので、生徒も、新しい、柔軟な多様性があるだろうという、ひとつのハロー効果は生まれるわけですね。これは私の考えですけれども、どちらかというところには対応した方がよいという、また、この辺は福井県独自の発想があるかと思えます。

福田会長

わかりました。それでは、時間も少なくなりました。オブザーバーの先生から御意見をいただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

鈴木オブザーバー

高校の教職員組合の鈴木です。発言の骨子を準備してきたんですけれども、本来ならば、議論の参考にさせていただくために最初にやるとよかったかなと。終わってからでは、言いつばなしで終わりかなというようには思っているんですけれども。実は、前回の高問協の会議の後に、組合で旧4学区の4地区で率直な懇談会を持ちました。そこで出た意見を踏まえてお話をしたいと思います。

私の職場は福井農林です。私は普通科高校から福井農林へ転勤しましたが、すごくいい学校だと思っています。なぜかという、高校3年間で、子どもが実習とか学校行事を通して、自信を回復して成長する姿が見えるのです。また、進路面でも国立大学から就職まで幅広く道が開ける。まさに、本来の教育、教育基本法とか学校教育法の教育の目的に向かって教育をやっているのだという思いがあります。これは、決して私一人の思いではなくて、4地区で懇談会をしましたが、本当にいろんな人が言っていました。農業とか工業、水産など、学ぶ内容は異なるけれども、それを通して人間教育を行っているという、そのような実態を是非理解していただきたいなと思えます。これは、職業高校全般の問題です。

それから、今日の議論等では、進路面からミスマッチが生じているのではないかとというのが一番の出発点です。現場では、ミスマッチが生じているという

認識はあまりありません。例えば、農業高校と水産高校は、第一次産業の、農林漁業のための学校なのかという思いも強く出されました。農林高校は、生産、加工、流通、さらには土木、家政、福祉系まで幅広い学科がありますし、水産も食品、水産経済科があります。また、農協とか園芸関係とか、食品、福祉あるいは養殖とか船舶業とか、関連分野に就職しているという実態も是非見ていただきたいと思えますし、あるいは、関連分野に就職したいと思っても、行けない現実もあると。これをひとくくりにミスマッチと言っていいのかという思いがあります。

また、一番最初に言いましたけれども、子どもたちが3年間学ぶ中で見つめ直して、違う道に進んでいくということもこれも保証していかなければならないんじゃないかなと思っています。

そして、一番大きな論点で、進学と就職が混在しているということですが、これも現場の教員からは、それが大きな課題になっているという答えはなかったです。逆にいうと、混在しているからいい。就職生の姿を見る中で、進学する希望徒も自分の進路を考えたり、あるいは、併設校の中からは、職業学科の方が目的意識が高いのではないかという声もありました。また、すべての職業高校で進学の補習をしておりますし、中には、進学用と就職用のコースをとっている学校も多くあります。基本的には、その学校の教育課程で子どもたちはしっかり学習をして進路を選択している。それが実態だというように思います。

今日、いろいろ細かい学校ごとの話し合いがなされたのですが、一点、総合学科についてだけ触れておきたいのですが、幅広く自由に選択できるというのが総合学科の特徴です。これが学習指導要領の規定とか、予算とか施設設備とか、今日の議論の中でも少し出ましたが、大きな差がある中で、職業学科と同じように総合学科で専門教育が行えるのかどうか、浅く広くなるのではないかという意見も出されています。ですから、これについては、本当に慎重に議論していただきたいなど。

準備してきたところではないのですが、今日の議論を聞いて思ったことは、拠点校とその他の総合学科という話になっていますが、地域で話さず、やはり地元の子が通ってきている、そういう思いがありました。福井県全体で拠点校が1校だけ、後の地域はその他総合系でといった、基本的な方向だけでいいのかなと。通学の問題もあろうと思えますし、やはり、地域の子どもたちに普通科の教育も職業系の教育も保証していくという視点も大事なのではないかと思います。それで、事務局から出された資料では、ここ5年後の生徒数の推移は若干微減または横ばいなので、僕は、もっと十分に慎重に議論してやっていく時間的な余裕があると思います。1回目から3回目までの中で、どなたも発言してないんですが、福井県は高校の少人数をやっているのです。他の県ではありません。まさに、全国唯一の県教育委員会の英断だなと思っているのですが、そういう教育条件を若干進めれば、当面十分対応していけるという視点がありますし、当初、3月末にはこの高問協の答申を出すという予定でしたけれども、あと1ヶ月でどうなるかという思いもありますが、僕は十分慎重に議論していく必要があるのではないかという思いがあります。

職業高校でも課題はあります。キャリア教育とか、離職率の問題とか、いろいろあると思うのですが、やはり、現場がどういう教育をしていくのか、その条件整備をどう運営していくのかということが大事だと思います。今日は、適正規模とかについては触れなかったのですが、残りの2つの諮問事項についても、私は、できるだけ現場の意見を聞いてそれを伝えたいという思いでいますので、別の諮問事項についても、発言の機会を是非お願いしたいと思えます。以上で私の意見陳述といたします。

福田会長

どうもありがとうございました。現場で実際にやっていらっしゃる先生からの御意見であって、ひとつの考え方をお示しになったと考えます。今日はかなり、広範な議論をいただきました。どなたかまだ御意見がございますか。

吉田オブザーバー

校長協会から来ております。この会では、非常に熱心に討議をしていただいていますので、教育界といたしまして非常に感謝をしているところでございます。せっかくの発言の機会を得ましたので、現場の校長先生の考え、それから私の考えを取り混ぜながら、簡単に意見を述べさせていただきたいと思っております。

新しい学科の導入につきましては、やはり、最先端に行くような学科はあまり必要ないだろうと。基礎・基本を教え、しっかり学ぶような学科が必要であって、基幹産業を中心に据えていくのがいいだろうと。先ほど、金井委員もおっしゃっていたのですけれども、時代が変わると、よく目先のことにとらわれて新しい学科の設置とか名称を変更しがちですけれども、工業高校であるならば、やはり、機械・電気・化学・土木・建築・情報などの基幹学科で基礎力を充分身につけていく、それ以外のところは、各学校で学校設定科目というものがございますので、それで対応していく、そういった方がいいのではないかという意見が結構聞かれます。しかし、反面、学習指導要領の見直しが10年ごとに行われていますので、やはりそれに合わせて、10年ごとに検討することは必要であろうと。

それから、社会のニーズに応じて、学科の新設とか変更とか廃止はありうることである。それから、地域と結びついている原子力関係とか、それから他の県でやっている観光関係の学科、それから情報の専門、やはりそういったものは新しい学科として考える余地はあるかなという意見も聞いております。専門高校、職業高校は、やはり地元・地域の産業経済を支えているわけでございますので、その地域に何が必要かということが一番考えていかねばならないと思っております。

それで、今、話題になりました専門性高校といいますが、農業とか商業とか工業、家庭、福祉などの学科をひとつの高校として扱うことですが、そういった考え方も必要ではないかと。そして反対に、普通科において職業系の専門コースなどを設置することなども、柔軟な学校づくりとしては必要ではないかと。やはり、県を上げて職業人の育成というのをお願いしていきたい。それからもうひとつ、2年から専門コースに入っていくという形ですが、これは、スケールが小さいとやはり難しいと思っております。小規模な学校では、部活動にしても、ソフトボールひとつとか卓球ひとつということが現実にありますし、やはり大規模校にしていけないと生徒のニーズが広がっていかない。例えば、芸術の教科にいたしましても音楽と美術と書道があるわけですが、小さな学校ではひとつの科目しか開講できない。美術がとりたくても開講できないということがあります。そういったことから考えましても、ある程度規模の大きな学校にしていけないと生徒のニーズを満足させる環境にすることができないのではないかと、そのように思います。

それから、各学校の中で2年から新しくコースに分かれるという考え、これは一括募集とか、くくり募集とかいうようですが、慎重にやらねばならないのではないかと。春江工業高で昔、電気と自動車と機械を一括募集したわけですが、問題点が非常に多く、やめてしまったという経緯がございます。この件につきましては、詳しくは言いませんけれども、やはり何か問題があるからうまくいかないのではないかと。それから、特に電気などは、2年生から専門教科を始めることになると、他校に遅れをとって資格試験の受験に不利であるという理由もあったそうです。社会情勢とか経済界とか産業界の現状把握と、将来の展望把握をしっかりしたところで、学科編成とか定員配分に反映をさせていかなければ、発展はないだろうと思っております。

最後に、教育においては、特に教員の研修というのは必要で、大学とか研究機関とか企業などに定期的に出向いて校外研修を受けて、スキルアップを図るといふ方策が必要である、そしてそれを生徒に還元をしていく、そういった形で望ましい職業高校を作っていくのが良いのかなと思います。以上です。

福田会長 お二人のオブザーバーの方に貴重な意見をいただきました。本当にどうもありがとうございました。

それでは一応、このような形でまとめさせていただきたいと思います。バトンタッチをして、事務局に司会を譲りたいと思います。

教育政策課長 貴重な御意見をありがとうございました。本日の議事録につきましては、事務局で整理いたしまして、ホームページで公開させていただきますので、御了承願います。

今後のスケジュールについてでございますけれども、4回目の会議につきましては、3月7日（金）の14：00にお願いしたいと考えております。

次回でございますけれども、前回、今回と職業系の在り方について御議論いただきました内容につきまして、ある程度方向性みたいなものが整理できましたら、事務局で整理させていただいてお示しさせていただくとともに、次の課題でございます「地域の実情等を踏まえた高校の規模および配置」等についての議論に移っていきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

福田会長 どうもありがとうございました。教育長、何かありますか。

広部教育長 今日は、大変建設的な御意見をありがとうございました。この職業系学科の在り方につきましては、私ども教育委員会といたしましても、長年の課題でございます。採用していただく企業の方とのいろんなミスマッチも指摘されておりました。それから、入学してくる生徒さんが、一番望ましい環境で、夢と希望を持って勉強に励んでおられるかどうか、このあたりも非常に気になっているところでございます。今後またこういったことにつきまして、私ども事務局といたしましても、いろんな方面からも御意見をお聞きしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

教育政策課長 それではこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。また、今後、資料を作成する都合上、事務局が委員の皆様にご意見を伺うことがあるかと思っております。御多忙中、大変恐縮ですが、その際は御協力をお願い申し上げます。

それでは第3回会議はこれで閉会させていただきます。本日は、お忙しい中、どうもありがとうございました。

以上